子どもの発達と保育・授業のポイント

発達には個人差がありますが、年齢を目安にしながら、実際の発達段階に応じた活動を仕組むことで、「主体的・対話的で深い学び」のある保育・授業につながります。

幼児期 ↓ 小学校（低中） ↓ 小学校（高） ↓ 中学校

思考

「学習」と「遊び」が分化していない。

★遊びの中で発想したことを、すぐに活動や作品に反映することができるように、材料や道具を整備した環境の中で遊ぶ活動を設定する。

見かけに左右されず、頭の中で筋道立てて考えることが可能になる。

★言葉や数字、図等の見かけから分かることだけでなく、意味や内容を根拠に考える活動を設定する。

事実に反することや抽象的な事象について考えることが可能になる。

★活動の魅力や好みだけでなく、意義を理解することで動機付けることが可能になるので、日常生活や将来と活動とのつながりを説明したり考えたりする場を設定する。

交流

仲間と集団で遊ぶ。

★実物や自然と触れ合う活動、子ども同士がかかわる体験活動を充実させる。

★活動の流れやルールは教師から提案しつつ、「それを守って交流したことで、仲間と楽しく活動できた。」と感じられるようにする。

リーダーシップを発揮する能力の高い子どもが中心になって活躍する。

★班長等を中心にした小集団で話し合う活動を設定し、「自分たちだけの力で課題を達成できた。」と感じられるようにする。

仲間関係が強くなり、特定の友人と深い人間関係を築く。

★多くの仲間とランダムに交流する活動を設定することで、仲間関係が固定されず、新しい発見を通して広がっていくようにする。

評価

親・教師からの評価を通して、善悪の判断基準を形成し始める。

★教師からの評価を中心に、子ども同士の評価を取り入れる。また、仲間のよさを見つけたことに対しても、教師からの評価を加えることを大切にする。

行動規範が親・教師から仲間に移行する。

★客観的に自己理解する力が十分ではないので、適切な自己評価ができるように、子ども同士の評価を基にした自己評価で振り返るようにする。

他者との関係の中で自他の違いを認め、自分の特性に気付く。

★自分の学習を客観的に理解できるようになるので、ねらいによっては自己評価のみで振り返るようにする。

東濃教育事務所